

国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育 — 開かれたネットワークによる取り組み —

平成23年10月16日（日）、日本文化研究所主催、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者 井上順孝 國學院大學教授）、宗教文化教育推進センター（CERC）の共催により、国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」を開催した。

このフォーラムは、次のような趣旨のもとで企画された。

宗教文化教育の教材は、これまで、教科書、参考書、補助資料等、活字媒体が主であった。しかし、映像資料もよく使われるようになり、インターネット時代になるとデジタル媒体も急速に広まっている。

デジタル映像は、YouTube やニコニコ動画といったインターネット上の動画投稿サイトやスマートフォンに慣れているこれからの世代にとって、ごく日常的な情報媒体である。また、だれもが容易に映像・動画をネット配信できることで、作り手と利用者の境界があいまいになっている。宗教文化に関する多様な情報がこのような環境のなかに含まれている。

宗教文化教育においては、これら情報を用いるさいのリテラシーや、教材作成・活用の新しい発想が求められるだろう。デジタル映像時代が宗教文化教育にどのような新しい課題を提示しているかを、幅広い視点から考えてみたい。

このような趣旨にもとづき、海外から2名、国内から3名のパネリストに、デジタル映像を用いた教育実践を紹介していただきながら、

その可能性と課題を提示していただいた。当日司会を担当した一人（もう一人は Norman Havens 神道文化学部准教授）として、その内容を簡単にお伝えしたい。

セッション1 中学校社会科における「宗教文化」の取り上げ方と映像を用いた授業 織田雪江氏（同志社中学校・高等学校）

織田氏は、中学校社会科の授業で宗教文化をとりあげるさいの近年の動向として、教育基本法改正にもとづく新しい中学校学習指導要領の2012年度からの全面実施にともなう「伝統や文化、宗教」の学習内容の充実と、開発教育・国際理解教育における「多様性の尊重」や「多文化社会」の観点からの宗教文化の学習とを挙げた。後者の実践例として、国立民族学博物館の貸出用教材「みんなぱっく」を参考にして集めたイスラム教に関連するモノを教材とした授業や、NHK「イスラム潮流」（1999年放送）の映像を教材とした授業を紹介した。さらに、戦時下の日系アメリカ人の強制収容所での生活を伝える映像をもとにしてニュース原稿を作成する授業や、神戸モスクでの生徒たちとムスリム女性との対話を紹介し、メディア特性についての認識を深める実践が「宗教文化」の学びでも生かせるとした。

セッション2 映像による宗教文化教育の課題—インドを映す映像とその受容のされ方をめぐって— 岩谷彩子氏（広島大学）

岩谷氏は、大学での大人数講義（「情報活用概論」）で活用した「インド」を表象する

3つの映像を紹介しつつ、それをもとに映像による宗教文化教育が抱えている課題を述べた。

3つの映像とは、まず、岩谷氏自身がフィールドワークのさいに撮影し、編集した南インドの霊媒師の映像である。2つめは、南インドの宗教実践者が映像制作会社に依頼して制作した、寺院でのセアンス（降霊会）を映し出す広報用映像である。3つめは、女神信仰を描いた勧善懲悪ものの商業映画である。

制作者、制作目的、被撮影者と制作者との関係、想定される視聴者がそれぞれ異なっているこれら3つの映像を授業で視聴し、受講学生に感想を寄せてもらったが、多くは映像の部分についての印象にとどまるものであった。このような受動的な構えを克服し、メディアに内在するフレーム問題と、メディアを通じた他者理解にともなう問題を喚起するには、どのような教材の提示が必要かを検討することが課題だとした。

セッション3 ニュージーランドの大学における Blended Learning と宗教文化教育—大学ティーチングの再考— Elica Baffelli 氏（オタゴ大学）

ニュージーランドのオタゴ大学で宗教学を担当する Elica Baffelli 氏は、ニュージーランドの大学教育の特性として、国内に点在する大学で開講されている科目を受講するために遠隔教育が積極的に採用されており、Skype 等を活用した e-Learning と教室内の集中コースとを組み合わせた Blended Learning の取り組みがあることを挙げた。そして、このような教育環境のなかで、さまざまなデジタル映像を教材とした宗教文化教育を行っているとし、YouTube や Second Life などを活用した具体的な実践事例を紹介した。メリットとして、学生の注意を喚起できること、活字・静止画資料に比べてものごとの複雑さを伝えられること、また学生自身が映像を制作して

みることで創造性が養われることが挙げられ、デメリットとしては適切な資料を探すための検索に時間がかかること、消去される場合があること、情報の信頼性が挙げられた。

セッション4 一回きりの経験の限界：アート教育におけるデジタル動画の活用 Alan Cummings 氏（School of Oriental & African Studies, University of London）

Alan Cummings 氏は、日本の古典文学・古典芸能をロンドン大学の学生に教えるさいのデジタル動画の活用を事例にとり、そのような映像の視聴経験を通して学生が何を学ぶかに焦点を当てることで、当の古典文学・古典芸能が生み出されたときと類似した環境がそこにあらわれていると主張した。

動画投稿サイトの YouTube で閲覧できる古典芸能に関する素材の数は、著作権の問題などもあり限られているものの、伎楽や延年の舞などの貴重な映像が見られる。また地方の民俗芸能をアマチュアの観客が撮影した映像は臨場感があり、それは演劇が他の観客と一っしょに見るものであるという感覚を思い起こさせてくれるという。また、学生が源氏物語などを人形劇に仕立てて演じた動画などは、それ自体がひとつのパフォーマンスとして、古典文学・古典芸能が産み出されたのと同様の創造性あるソーシャル・ネットワークを経験させるものとなっている。

セッション5 宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題— 平藤喜久子（國學院大學）

平藤氏は、大学の授業で日本人および外国人学生に日本の宗教や神話を教える授業を担当している経験から、宗教文化に関しては他文化・自文化という差はもはやなく、日本文化が他文化化している状況を指摘した。そして、YouTube の投稿映像や映画を活用した授業において、この差のない状況で学生の関

心を惹く映像素材がいかにも有用であることを述べた。

しかし同時に課題もあるという。映像教材によって学ぶべき神話などの内容そのものではなく、登場人物の身なりなどの注意を惹くものに学生が集中してしまうことや、またコミュニティの土着の文化よりも主流文化のステレオタイプの理解を促進してしまうおそれがある。こうした問題を回避するような授業の工夫が必要であるとした。

コメント 岩井洋氏（帝塚山大学）

岩井氏は、5つのセッションに対する総括的なコメントとして、次の3つの問題を指摘した。

第一は、「二重のリテラシー問題」。デジタル映像を教材とする宗教文化教育には、「宗教リテラシー」と「メディア・リテラシー」という2つのリテラシーが関わってくる。さらにそれは学生のリテラシーと教員のリテラシーのズレという問題でもある。

第二は、「二重のフレーム（枠）問題」。現実を切り取るフレームと、思考を枠づけるフレームである。前者は周りのコンテクストを抜いてしまうものだが、逆にCummings氏の発題はそのコンテクストを浮き立たせて、古典文学・古典芸能が生み出される環境と今日の情報環境を結びつけるという試みになっていた。後者は、平藤氏の発題にあったような、土着の民俗文化の主流文化化、ステレオタイプ化といった問題につながっている。

第三は、「授業デザイン問題」。今日の大学教育では学習到達目標の明確化が叫ばれており、どのような授業をめざして何をやるかが真剣に議論されるようになってきている。そのさい、方法、素材、知識、スキルといった要素のそれぞれに注目し、どのような素材を使うかだけでなく、知識・スキルという面でどのような発問をするかということにも注意を向ける必要がある。

総合討議

岩井氏のコメントを受けて、まずパネリストの5人がリプライを行った。織田氏は、授業デザインに関して、いろんな素材をとりあげながら批判的な解釈を養っていくことを課題として挙げた。岩谷氏は、学生の関与・参加が重要だとして、たとえば不快なほどの大音量で聞かせるなど、身体的な感覚にはたらしかけ、フレームの存在に気づいてもらう工夫を紹介した。Baffelli氏は、学生のメディア・リテラシーが多様であり、メディアを研究したことのない学生にそのことを注意させるのは難しいとした。Cummings氏は、必修授業でやる気のない学生からよい反応を引き出すツールとしてデジタル映像環境を考えていると述べた。平藤氏は、神話の授業では文化多様性から来る問いが生まれること（旧約聖書の天地創造を神話とすることへの抵抗感）を期待しているが、そこからズレた反応が出てしまうこともしばしばあり（浦島太郎はかわいそう）、そこに授業展開の難しさがあると述べた。

さらにディスカッションでは、デジタル映像を教材とすることで生じる教員の意図と学生の解釈とのズレに関して、それを当然のものとして受けとめつつ、どのような工夫ができるかが語られた。批判や皮肉の込められた映像は使わないこと、差別的な表現に敏感であること、といった対処策や、ズレの中身を分析する視点をもつことなどが提案された。

むすび

デジタル映像を活用した宗教文化教育のあり方に関して、具体的な授業実践を組上に乗せた発題とディスカッションは充実した実りの多いものであった。フォーラムの副題にある「開かれたネットワークによる取り組み」とは、宗教文化教育に携わるそれぞれの教員、研究者の工夫の積み重ねや抱えている課題を、このフォーラムのような開かれた場で交換し、

それを明日からの教育に反映させていくことを狙いとするものであった。フォーラムでは、岩井氏の的確な総括のおかげで、国内外の教員で思いのほか悩みや課題を共有しているこ

とがわかったことも、大きな収穫であった。これからもこの連携の輪を広げていきたい。
(黒崎浩行)